

# 大学生と大学教員に図書館をアピールする方法

## —教員の目線から—

近田 政博 名古屋大学高等教育研究センター 准教授



### はじめに

茂出木さんのお話の中で、いくつか皆さんがお気づきになった点や刺激になった点が、多分あったと思います。

というのは、一見とてもわかり易く、平易な話をされているように聞こえるのですが、実はものすごく深いメッセージが散りばめられていて、私は二つの点が非常に印象に残りました。

一つは、茂出木さんのお話は、ある種の逆説なのです。つまり、セオリーはもちろんわかり切っているのですが、敢えてそこを逆説で実証していくという点が非常に面白かった。

例えば、いくつか色々な文献を紹介されていましたが、そこには一つか二つを除いて、図書館学の文献はほとんどありません。ほとんど経営学とかコミュニケーション学、リーダーシップ学や大学職員論などです。図書館学の文献はほとんどない。そこは意外ですよね、図書館の方に対する研修で講演するとしたら、当然そのような文献を紹介すると思うではないですか。ある意味そこは、全くいい意味で肩透かしというか、よりもっと汎用的な、幅広いコミュニケーションの力とか、リーダーシップの力とか、マネジメントする能力が「実は本質的にすごく重要なんだよ」というような意味が込められていたのではないかと感じました。そういう意味で、非常に逆説的かなと思いました。

もう一つは、わかり易い言葉で仰っていたのですが、一つひとつの中に非常に、メタファというか色々なたとえ話や意味が込められていることです。つまり、最初に仰った自明な事を言っても意味がないというのは、全くその通りだと思います。今回の研修テーマは「学習支援としての図書館」というお話でしたが、「それは当たり前だ」というところから話が始まったのです。私も実は、全く同じ事を幹事の方に申し上げておまして、最初に『学習支援としての図書館という観点から、学生に対してどうやって図書館の学習支援の事をアピールしたらいいか』という観点で話をしてくれ」という依頼を頂いたのです。私は、「いや、それは止めましょう」と。それを依頼されたのにそれを断るって、変ではないですか？それなら引き受けない。しかし、私も全く茂出木さんと同感で、大学生に対して学習のサポートをすることは、ある意味では当然なのです。それで、当たりのそのことを今更言っても仕方がなくて、少しひとひねりしたいと。ワーキングAのところでは、対象者が学生だけではなく、これから入学する高校生や保護者とか、ステークホルダーとして、例えば教員とか、他部署の職員とか、色々な関係者を提案したいと思いました。実は私も名古屋大学の図書館の研究開発室員を兼任しており、図書館関係者の一人なのです。ただ、どちらかというと図書館の関係者というと「学生」と、暗黙に限定しているところがあるのではないかと考えています。しかし、実は関係者は「学生」だけではないのではないかと考えており、その点で非常に茂出木さんの話が面白かったです。

私は、高等教育の研究センターに所属している名古屋大学の教員です。教職員の研修プログラムの作成や色々な教育改善や学習促進のための教材開発、教授法のテキスト作成や、最近では大学院生の研究指導のノウハウを蓄積などしております。また新入生向きの学習支援の教材や、ドクターコースで大学の先生を目指す院生に向けて、大学教授職とはいか

なるものかというような本を作っております。最近  
は留学生を沢山受け入れており、もうすぐ2,000人  
近くになりますが、教員が留学生を受け入れる際に、  
どういう誤解が生じやすくて、どうすれば問題を  
未然に防げるかというようなテキストを作ったり、  
ケーススタディを行っています。それから、大学院  
の高等教育学講座を担当しており、大学院生を受け  
持っています。

## 1. 相手のことを知ることの大切さ

今日のお話の要点なのですが、「そもそも、学習  
支援と言うけれど、現代の大学生の実態について、  
我々はどのくらいのことを知っているか」というこ  
とを申し上げたいと思います。

皆さん、ご自分の大学の大学生の学習状況をおお  
よそご存知ですか？データとしてお持ちですか？例  
えば、どういう所からやってきていて、受験の時に  
どういう科目を受けたか。家庭状況はどうで、下宿  
生と自宅生の割合は何パーセントか。それから、彼  
等の1ヵ月の生活費はいくらぐらいで、1ヵ月に使  
う図書を買うお金はどれくらいなのか、ご存知です  
か？

東大が、だいたい2年に1回「学生生活実態調査」  
というものを実施しています。学生支援をするなら、  
その相手のことを知らないといけない。「孫子の兵  
法」ではないですが、「己を知り、敵を知れば、百  
戦危うからず」というでしょう？学生は「敵」で  
はないですが、相手の事を知ることが、やはり大事  
です。

それから、図書館の大事なステークホルダーと言  
いますか、関係者は必ずしも学生だけではなく、教  
員でもあるし、職員でもあるわけです。ところが、  
おそらく図書館の職員の方々は学生しか、あまり目  
がいていないかもしれない。教員とはどういった  
職業の人達なのかということも、少しご紹介した  
と思います。その上で、教員を巻き込まないと図書  
館は活性化しないと思います。教員を巻き込むには  
どうしたらいいか。それから、他の部署の職員の方  
々を巻き込むにはどうしたらいいか。最後に、これ  
から図書館はどのような方向に進んでいったらいい  
と思うか、これはあくまでも私見ですが、簡単に申  
上げたいと思います。

## 2. 大学にとっての附属図書館

これも私見ですが、大学にとっての附属図書館と  
いうものの位置づけですが、もともと図書館は、図  
書を保存する書庫なのです。古来のエジプトのアレ  
キサンドリアが、古代における最大の図書館だっ  
たと言われていますが、書庫の時代が長く続いて、お  
そらく中世を通してずっと図書館は書庫だったので  
すね。

ところが近代に入って、図書館で本を借りて、そ  
こで閲覧をして、学習をするという機能が広がって  
きた。これはもう今、どの大学でも当然その第二段  
階にあるだろうと思います。

今は、やや第三段階に来ている。第三段階とい  
うのは、多様な学習をする場になってきている。つま  
り、図書館の本を借りる・借りないにかかわらず、  
図書館という場で学習を深めたり、情報を検索した  
り、あるいはお互いのコミュニケーションを図った  
り、研究をしたり、多様な学習の場が提供されるよ  
うになってきている。おそらく今、皆さんが直面し  
ている状況は、この第三段階をどう展開したらよい  
のか、というところが多いのではないかと思います。

私は、第四段階までであるのではないかと、個人的  
には考えています。図書館は、学生だけではなく教  
員や職員にとっても重要な場、皆のリトリート空間  
だと思います。リトリートというのは、さきほどの  
茂木さんの言葉を使うと「自省」、ローマの五賢  
帝のマルクス・アウレリウス・アントニヌスの「自  
省録」がありますが、自ら省みるシステムです。そ  
れから「静修」といって、「静かに修める」。自分の  
職場などからちょっと離れて、自分自身について静  
かに目を閉じて、静かに思い巡らすことを「静修」  
という風に言います。これはもともと、キリスト教  
の用語です。キリスト教の世界で「リトリート」と  
いう言葉をよく使うのですが、そういう「リトリ  
ートの場」として、おそらく、これから機能してい  
くことが重要ではないかと感じています。つまり、学  
生だけではなくて、教員や大学職員など全体の構  
成員、皆の「リトリート空間」という方向に、これ  
から移っていくといいなということを、個人的な気持  
ちに過ぎませんが考えています。

## 3. 教員目線から見た大学図書館

ところが、教員目線から見ると大学図書館は、必

ずしもそれほど身近な感じはしません。何故しないのでしょうか？

教員ですから、図書館に新しく出た本を発注することがありますが、納品後、登録されて使えるようになるまで1ヵ月くらいかかります。そうすると、もう必要な論文を書かなければならない〆切りは終わっているのです。間に合わない。自分の研究という観点からすると、図書館に本を発注していたら全然間に合わないのです。今は、特に理系の先生は、研究室から電子ジャーナルをザッとダウンロードして、すぐにその場で打ち出して、その場でパッと見れるかどうかというスピードです。図書館に本を発注して、1ヵ月後に手続きが終わって、それをまた借り出して、読んで…という感覚からすると、必ずしも図書館は身近になっているという感じはしないのです。電子ジャーナルが普及したお陰で、逆に教員とか大学院生は図書館に足を運ばなくなりました。皆さん、図書館で仕事をされていてどうですか？先生方は来ますか？大学院生は来ますか？あまり来ないのではないですか？それには理由があるのです。研究室でもう必要な電子ジャーナルが、すぐ全文ダウンロードで打ち出してしまうからです。

もう一つは教員は、図書館をどうやって自分の授業や研究に活用したらよいかというノウハウを、意外にもあまりよく知らないからだだと思います。図書館というのは、どちらかというところ「学部生が使うものだ」という感覚が教員の側にもあるのです。ということは、図書館がいくら新しいサービスを色々提供をしても、教員は意外と知りません。ここは盲点です。

#### 4. 今日における大学図書館の課題

今日における大学図書館の課題として、図書館スタッフ、ここにいる皆さんもですが、ネット世代の大学生の現状や学習志向を必ずしもよくご存知だとは限らないことがあげられます。つまり、ご自分の大学の学生がどういう学習履歴だとか、どういうバックグラウンドを経て来ているか、ということ詳しく掴んでいるわけでは必ずしもないですね。電子ジャーナル化が進み、教員や大学院生があまり図書館に来なくなりました。今日は大学院生の方が二人来ていただいています。いかがですか？ご自分の大学の図書館に行きますか？

(大学院生)

私は行きます。だいたい、CiNii などデータベースで必要なものを調べた上で、雑誌を取りに行ったりということぐらいでしょうか。

(近田)

そうすると、研究室には来ているけれども、図書館にはわざわざ行かない可能性もあるということですか？

(大学院生)

そうですね、CiNii であれば、それで、ということもありますね。

(近田)

そうですね。

そうするとやはり、図書館と授業の連携とか、教員との連携とか、大学院生とか、図書館と他の事務職員との交流が、必ずしも十分とは言えないのではないかと。これは教員の目線から見たときですよ。

それから、留学志願者や学生の保護者、卒業生、卒業生を雇用する人とか地域住民など、多様なステークホルダーについて、どのくらい念頭に置かれているか。ただ、最近の大学の図書館を見ていると、その大学のある地域の住民の方に開放している所が増えているのではないのでしょうか？皆さん方の大学で、例えばその大学の置かれているその市の市民、地域住民等に開放しているよ、という方はどれくらいいらっしゃいますか？ 多いですね。かなりそれは普及しているという考えでいいのかもしれない。

#### 5. 全国大学生調査から見える学生の実態

現代の大学生の学習状況についてですが、これは一般論です。皆さんの大学の大学生は微妙に違うと思います。あくまでも一般論で、4年ほど前に東大が実施した全国の大学生調査の結果を、少しご紹介したいと思います。これは全国でも最大規模の調査で、東大生ではなく全国の大学生について、東大が調べたものです。

##### ○不本意入学の学生

これが衝撃的なのですが、第一志望ではない大学

への入学が、今4割です。つまり、皆さんの大学図書館に来る学生のうちの4割、5人に2人が、「本当はこの大学に来るはずではなかった」と思っている学生だということです。これも逆説的に面白いのですが、今、大学は、選ばなければどこにでも入れる時代になりましたでしょう。だとしたら、不本意入学は少ないのではないかと思いますでしょうか？そんなことはないのです。選ばなければ入れる時代になったからこそ、選んで入りたくなっているのです。選んで入りたいから、不本意入学は減っていないのです。私の大学でも、こっそり調べたことがあったのですが、やはり3割くらいが不本意入学だと思います。

おそらく東大も不本意入学は結構います。どういう意味の不本意入学かというと、「進みたい学部に進めなかった」という不本意、駒場から本郷に移る時に“進振り”というものがあるのですが、ものすごく不本意な学生がいます。それから、本当は文一に行きたかったけれど文三だったとか。そういうことを言っていたら、東大の中でも不本意な学生はゴロゴロいるわけです。だから、どこの大学に行っても「本当の私はここにくるはずではなかった」という顔をしている新生は、かなりの割合でいるはずなのです。

その学生に対して、われわれ教職員はどうやってアプローチをしたらいいのか、ということは先生が考えることだと思っただけでしょう？それは、やはりこれから、多分職員が一緒になって考えていくことが重要ではないかと思っています。大学1年生の授業を担当するときに、教員が一番苦勞するのがここなのです。不本意で入ってきた学生が、こ～んなに(うつむく姿勢)になってしまうのです。授業して、その学生にちょっとでもうつむいている顔を上げて欲しいというところが、結構苦勞します。

#### ○大学の難易度と大学生の目的意識の関係

それから、大学の難易度と大学生の目的意識は、やはり一定の関係があるようです。これは大学の難易度です。青が比較的lowの大学、中間ぐらいが赤です。これは偏差値の45、45～55、55と分けてありますが、55より上というのだいたい上位3割くらい、(45より)下が3割くらいですね。真ん中が4割くらいですね。やはり、偏差値が高い方が、やりたいことが見つからない学生が相対的に少ないのですが、偏差値が低い大学になると、「やりたいこと

が全然ない」という学生が相対的に増える傾向があります。必ずしも一致はしないけれど、一定の相関はあるということです。

#### ○つまらない授業に出席する学生たち

今は、興味はわかなくてつまらない授業にも、休まずに一応は来ます。つまらないか、面白いかということに関わらず、取りあえず来てくれます。だから今、我々が教員研修で言っているメッセージは「先生、自分の授業に学生がちゃんと来てくれるからと言って、先生の授業が面白いと思って来てくれているわけではないのですよ」ということを言うようにしています。昔の感覚でいくと「面白い授業に出る」という感覚だったわけです。私は40代ですけれども、多分私の時代くらいまでそうでした。

つまり、デフォルトが、基本はまず「出る」というところに入っています。しかし、出るからと言って真面目に聞いているとは限りません。後ろの方で指だけ動いていることは、よくありますよ。それは珍しくないです。これは分野によって違うのですが、保健とか家政系は、かなり真面目に出る割合が高いです。これは、資格試験が国家資格と直結しているということと、女子学生の割合が高いということがかなり影響しています。女子が多いところほど、出席率は概して高いです。

それから、予習復習を行う学生はあまり多くないです。これは、分野に限らずあまり多くないです。

#### ○学生の読書量

これは図書館にかなり関係するのですが、「漫画を除く1ヵ月の読書量」については、「読まない」というものが3割、「1冊」が約3割。つまり、彼等はそもそも本を読む習慣自体がないかもしれない。もっと言うと、新聞を読む習慣もないかもしれません。今の大学生は、特に下宿生は、先ず新聞は読んでいないと思った方がいいです。新聞の購読率は、大学生はものすごく低いのです。ネットでちょっと見れますし、下宿生で自分のお金を払って新聞を購読していることは、まず稀です。我々の頃は結構ありましたが、今はもう、それが出来ない状況になっています。一つは経済的な理由があります。

それから、読書量ですね。専門分野別に見ますと、一生懸命に授業に真面目に出ている保健・家政系はむしろ低いです。これは傾向として出ます。全体的にはあまり本を読む習慣がきちんとついていま

せん。以前に1年生の授業の際、「君たちが高校を卒業するまでに最も今までに感動した本、18年か19年の自分の人生で最も影響を受けた本を1冊選んで、それを持ってきて紹介してくれたまえ」と課題を出したところ、12人のゼミで半分、7人くらいかな？男子学生でしたが、男子学生のほとんどが漫画でした。活字の本を読んでいない。女子はもう少しましでした。しっかり活字の本を読んでいました。

東大生でも似たりよったりです。受験勉強はしているが、自分で自発的に活字の本を読んでいるかという、必ずしもそんなことはありません。受験勉強以外のことで、活字をしっかりと読んだり、読書をするという習慣自体が無い可能性があります。その理由の一つで、これは自宅生ではない下宿生だけのデータですが、実は家からの仕送り額が、90年代半ばくらいをピークにずっと下落傾向にあります。少しデータが古いのですが、ついに7万円を割りました。ということは、今の下宿生の経済水準は、ほぼ30年前の水準ということになります。30年前というと、30年前に大学生だった方は、今だいたい50歳くらいですが、その時代と経済的には全然変わっていないわけです。世の中の物価が少し上がっているため、生活がなかなか大変なのです。従って、彼等の経済状況を見ますと、携帯電話を使っているお金はあまり増えていません。それから、本も全然買っていない。交際費も、バブル時代のように大学生が車を乗り回して、何千円もする高級レストランに行くといったことは全然なくて、すき家で280円の牛丼をガールフレンドと一緒にシェアして食べています。だから、彼等は結構経済的には今苦しいです。それほどお金を本に費やせる余裕はない、というのが事実です。

## 6. 雇用する側と大学生の認識のズレ

これは経済産業省のデータですが、「大学生を採用する側、雇用する側が大学生に対して何を求めているのか」ということと、大学生自身の自己認識がどれくらいズレているか、ということを表しています。3年ほど前に中小企業を対象に実施された調査です。

これによりますと、「社会に出て活躍するために必要だと考える能力」について、日本人の学生と企業の採用担当者側で比較したのですが、かなりズレがあります。学生側は人柄、コミュニケーション力、

チームワーク力。この辺は企業の方もそうなのですが、主体性、一般常識とか業界に関する事などは、かなりズレが目立ちます。主体性とか一般常識は、学生の側よりも企業の採用担当者が「より重要だ」と考えている項目で、業界に関する一般、専門知識などは、むしろ別にそれほど求められていないのは意外でしょう？

学生に「既に身に付いていると思う能力」を自己申告してもらったのですが、これは企業側が学生を採用する時の「学生が既に身に付いていると思う」という要素と、かなりズレています。ここに見ますと、業界に関する専門知識やビジネスマナーなどは、学生は「全然身に付いていない」と思っています。しかし、企業が「そんなことは大した問題ではない」と見ている。

このようなデータが私たちに何の関係があるのだろうか、と思われるかもしれませんが、関係があると思います。採用する側は、付け焼き刃的な専門知識とかビジネスマナーではなくて、もっと総合的な、茂出木さんの定義を使えば「インテグリティ」、つまり「破綻しない総合力」を求めているのだらうと思います。細かな資格とか、暗記して詰め込んだりするところではなくて、やはり「総合力」が求められているのです。

学生は概して、一般常識や一般教養を軽視する傾向が確かにあります。しかし、社会ではむしろ、こちらが見られているのです。だから、文系とか理系とか関係なくて、しっかりと日本語で挨拶ができて、日本語の文章が、わかる文章が書けること。相手の言っていることが理解できない人は、文系とか理系とか関係なく落ちます。これが基本だと思います。

もう一つは、大学は今見かけの就職率を上げて、就業力支援とか色々行っておりますが、その後すぐにやめてしまったら意味がありません。大学生が3年以内に離職する率は30%と言われていています。短大生は50%、高卒は7割。つまり、皆さん方の大学の卒業生の3分の1は3年以内に辞めてしまったら、あまり意味がありません。それを、いかに下げられるかということも大事なことです。

それからやはり、先ほどのデータであります、チーム全体で働いたりとか、論理的に物事を考えることや、ただ単純に答えを暗記するような教育からいかに脱皮できるかということも、社会的には非常に重要だと見なされていると思います。

## 7. 教員が学生に訴えているメッセージ

### ○知識注入型学習から自発的・自律的学習へ

今、なかなか解がない時代になっています。現在、大学教育の現場で、これは名古屋大学のケースですが、全学教育と言いますか、特に1年生・2年生の教育のところ、少し方針転換をしています。そこで、学生に対して訴えているメッセージを簡単にご紹介したいと思います。

それは一言で言いますと、「知識注入型の学習から、自分で学んで自律的に学習する習慣をつけるようにさせる」ということです。少し矛盾していますが、「自律的に学べるようにさせる」というのは、ある種の誤記矛盾なのです。それは何かと言いますと、学校にいる時までは、問題集の後ろを開けば答えが載っていますが、卒業したら解はありません。少子化の問題一つをとっても、現在起きている領土問題、尖閣諸島だとか竹島の問題一つをとっても、「こうすれば絶対にお互いにとってハッピーだ」とか「Win-Winの関係で解決できますよ」というような単純なものは多分ありません。そんなに簡単な答えがあれば誰でもわかります。しかし、それほど単純ではない。科学技術でも、それほど単純ではないと思います。「解」は複数あるかもしれないし、あるいは存在しないかもしれない。社会の問題というのは、すべからず大部分はそんなに単純に答えは見つからないですよ。多分、むりやり答えを設定して、問題集の後ろに載せておいてパターン暗記して、一定の反復学習することによって、基礎知識を身につけてきたのが、小学校から高等学校までなのです。社会に出たら、それだけでは応用が利かないこととなります。それは基礎学力として大事ですが、それだけでは十分ではなく、学生に対してよく言うことなのですが、「通説を鵜呑みにするな」ということです。

### ○通説を鵜呑みにすることの危険性

スピーチとか話し方の一つのスキルなのですが、「Devil's advocate」という話し方があります。わかり易く言えば、「悪役を演じる」ということですが、少し人の気に障ることをわざと言って、ちょっと悪役を演じようという意味です。

例えば、太陽は地球の周りを回っていますよね。朝起きたら東の空に太陽が昇りますよね。何も知らなかったら、太陽が勝手に地球の周りを回っている

と思うのではないですか。なぜ、太陽ではなくて地球の方が回っているということを知っているのですか？教科書に書いてあったことは、正しいですか？それは正しいということを前提で習っていますが、それだって500年前までは太陽が動いていると書いてあったかもしれないでしょう？本当にそれを信じてたわけですよ、人類が。

それから、つい最近までアメリカの南部では「人間は神によって作られた」ということをずっと教えられてきたわけです。「人間は適者生存の結果、ダーウィンの進化論に基づいて、より強い種が生き残るという進化を繰り返していた結果、人間にたどり着いたのだ」という進化論的な学説を唱えた高等学校の理科の先生がクビになったのです。これはどこかの原理主義の国ではなく、アメリカのことです。

私の母親は「アメリカ人やイギリス人は鬼や獣だ」と教えられて、「ある夏が終わって、学校が始まったら先生の言うことが変わった」と言っていました。小学校3年生の時に戦争が終わったそうなのですが、「その時に確かにこう言われていた」ということを言っていました。「原子力は絶対に安全である」と言われていました。私は子どもの頃、そう習った記憶があります。だから、何を言いたいかと言うと、政府の姿勢や教科書に書いてあることは絶対ではない、ということなのです。

100年たてば相当変わります。今から100年前の明治時代の教科書を読んだら、多分ビックリされると思います。逆に言うと、今から100年後の教科書もその位変わる可能性が高いと言うことです。従って、図書館の機能や図書館の役割も、100年たてばすっかり変わってしまうかもしれない。世の中に絶対はないのです。だから、「これは、こういうものなのだ」と決めつけて鵜呑みにするのは危ない。その前提が、ガラガラと崩れてしまうかもしれないのです。

昔、トーマス・クーンという人が、「科学革命」という話をしたのですが、科学というのは色々な学説で積み上げられていくのですが、それをひっくり返すような通説転覆が起きて、今まで積み上げてきたものがガラガラと崩れてしまう。そうすると、全く違うセオリーが起きてきてしまう。つまり、科学の発展というものは、一つひとつ積み上げていった結果、富士山のように登って進化したものではなくて、ある段階まで行きガラガラと崩れて、また積み上がってくるというのです。科学革命というものはそのように、「パラダイム」といわれる思想、積み

上げてきたものがひっくり返って崩れて、また新しいものが積み上げられていくという形で進化している。ずっと蓄積してきたものではなくて、そのようなどんでん返しの歴史だということです。

実は皆さん方の大学図書館の中に所蔵されている本も、そのような通説転覆とか、どんでん返しの歴史なのです。そういう歴史の蓄積だと思うのです。

### ○なぜ批判的思考力が大事なのか

なぜこのような批判的な思考力が大事かということですが、もし今ブラウン管のテレビの技術者だしたら、どうしたらいいですか？なくなってしまっているのです。私はベトナムの研究もしているのですが、ベトナムでもブラウン管テレビがほとんど無くなってしまいました。中国はほとんど無いのではないですか？むしろ、液晶テレビですら、普及したばかりなのにもう売れなくなってしまって、シャープの亀山工場どうなるのでしょうか？「私は液晶屋です」とか、「私はブラウン管屋です」とか、「私はエンジニアです」とか、人間は何でも「この専門家です」と自分で自己定義したがるのですが、「私はレファレンス屋です」とか、図書館の世界では何というのでしょうか？目録屋さんとか情報屋さんとか、システム屋ですとか、自己定義していると、技術革新とか社会変化が起きると、もうにっちもさっちもいなくなるのです。ガソリンエンジンさえ10年経てばどうなるかわからないですよ。

### ○異文化体験の奨励

だから、どうしたらいいのかと言うと、それほど簡単に解はないのですが、今、学生にこんな事を言っています。「異文化体験をしましょう」と。異文化体験とは、海外旅行ではないです。海外に行くということではなくて、今自分が置かれている、その立場の周りの人との間での体験のことです。今日、茂出木さんの話が聞けたことは、私にとってある種の異文化体験と思っています。

そういう意味での異文化体験です。夫婦でもいいし、親子でもいいし、友人も。夫婦って最大の異文化です。私は夫婦10何年していますが、「え～！」と思うことが話題になりますよね、「お前そう思っていた？」「違う…」。兄弟だって、同じ親から生まれてきたのになぜこうも違うのか、と思うくらい違います。だから、やはり「それはちょっと違うんじゃないか」ということを言ってくれるような相手を持

つ事は、結構大事だと思います。自分の言うことに「うん、うん」と頷いてくれる相手ばかりだと居心地がいいのですが、ちょっと視野が狭くなってしまいうので、「う～ん、どうかな」という人は結構重要だと思います。でも、地域社会や田舎の中で、愛知県はまあまあ田舎ですから、やはりそのようなことばかり言っていると、職場で浮き上がったりするのではないかと思われるかもしれない。それもわからないではないが、多様な意見を擦り合わせることで、より、より自分の考えを合理的で、頑健で、健全で、適切な方向に導くことができるかもしれません。

ここが重要ですが、「空気を読む」ということが日本の社会でとても重要視されていますが、「空気を読まないこと」も大事だと思います。「読めない」ことではなくて「読まない」ことです。多数派が常に正しいとは限りません。なぜかと言うと、例えばドイツのアドルフ・ヒトラーは、何もドイツでクーデターを起こして政権を握ったわけではないのです。彼は、1933年だったかな、国会のドイツの帝国議会の選挙で第一党になり、しっかり選挙で首相になって、民主的な手段を踏んで独裁者になったのです。だから、多数派の言うことが正しいとは必ずしも限らない、というような事もあります。

### ○新聞・本を読む習慣をつけさせる

「新聞や本を読む習慣を付けましょう」と、当たり前ですが、読書は思考のトレーニングでもあるので「一人になる時間と空間を設けてみましょう」と言っています。ラーニング・コモンズなどでもいいです。とても良い場所だと思うのですが。

それから、新書というものがあるので、現代の知や新しい知を知るにはとてもいい機会なので、「新書というものを読んでみたらどうかな」くらいな事は言います。「新書って何？」というところから始めないといけません。新書って知らないですよ。

また「新聞の書評を読んでみると勉強になるよ」と言います。授業で、「書評って何ですか？」と言われました。「書評というのは、日曜日に起きたら新聞の真ん中辺りを開くと、何か新しく出た本を紹介したページが載っている、それを書評という」「ああそうですか。書評とはアマゾンに載っているやつかと思ってました」。あれはレビューというか、コメント程度になりますが、書評と言うほどのものではないですね。「それなりの専門家がちゃんと批評したものが書評というもので、新聞に載っているよ」

というところから言わないと、多分わからないと思います。

### ○学生に伝えたい文章表現の基本

学生に伝えたい文章表現の基本について、このようなことを言っていました。「一文を短く話しなさい」「何とかで、何とか何とかなので、何とか何とかなんだけど…」とリプレイスしていても、「何をしたいの?」「なるべく明確に主語述語が分かるように話しなさい」と言いたくなる時があります。「あれが、それが」と言われたり、「っていうか」と言われるとわからないですよ。この前学生から「っていうか」と言われ、また「っていうか?」と言われて、「っていうか」が2回出てくると、もう何を言っているんだかわからなくなる。これが、とうとう論文の中にも出てくるようになりました。冗談ではなく本当の話です。

自分で省察して、学ぶ習慣をどうやってつけさせたらいいか、これですね。知識を与えるだけではなくて、「実はとても多様な見方がある。答えは一つに限らない。色々な解釈がありえるし、社会はとても複雑だ」ということに気づかせる。ということは、子どもから大人になっていくということは、ある種の複雑性みたいなものを受けとめていく、ということでもあると思います。家庭でも、社会でも、矛盾だらけです。

自分の言葉で表現する力をどのようにつけさせるのか。ラーニング・コモンズなども、こういう役割を果たしているかもしれないですが、学生相互の人間関係を、お互いの人間関係をどう築いていくかというようなことが、これから学習支援をする時に重要になってくるのではないかと思います。

## 8. 大学教員の志向性

では、大学教員はどのような志向性を持っているか。職員と教員は少し文化が違います。例えば、大学職員は中日新聞の社員、教員は中日ドラゴンズの選手。必ずしも1億円はもらえないけれど、しっかり雇用は安定している大学職員と、1億円もらえるかもしれないけれど、3年でクビになるかもしれない大学教員。こういう違いはあると思います。それから、皆さんの帰属意識は?図書館に対する帰属意識ですか?それとも大学ですか?どのレベルで帰属意識がありますか?少し教えていただけませんか?

自分の中で最も感じる強い帰属意識は、大学なのか、図書館なのか、それとも今、所属されている課なのか、3パターンくらいでお答えいただけますか?

(参加者、挙手)

なるほど。そうすると、大学か、図書館かということなんですね。教員は、先生いかがですか?

(教員)

学科です。

教員は、やはりこれくらいのレベルが多いです。大学に対する帰属意識は、実は大学教員はそれほど高くありません。フリーエージェント選手なのです。だから、学部でも大きすぎますでしょう?学科からもっと突き詰めていくと、最後は自分の研究室です。私もそうです。最後の自分のアイデンティティーは自分の講座です。同じ学科の他の先生が行っていることは、実はあまり関心がなかったりします。教員は、非常にそこは分かれています。

職員の規範は、やはり「業務命令」がありますでしょう?あと「法令」が大事ですよ。教員は、「合理性」、「エビデンス」ですね。

組織文化は、職員は「公平性・同質性」、国立大学だと「官僚制」もかなり強いです。教員は「極めて強い同僚性の文化」です。つまり学長や副学長も同じ教員仲間くらいにしか思っていない。職員の方からみると、「全然上下の秩序がわかっていない」と思われるかもしれない。本当にそうです。僕などは、時々思いつくと理事の所に電話して、「ちょっといいですか?聞きたいことがあるのですが…」とズカズカと行ったりします。そういう無神経さは、職員の方では考えられないくらい上下のことには無頓着です。よく言えば、「自律と合意形成」。褒め言葉では、職員は「常識的な人だね」「空気が読めるね」と言われますが、教員は違います。「変人だね」これが褒め言葉です。私、「変人だ」と言われたら嬉しいです。「あの人は常識が通じない」というのは、褒め言葉なのです。

「教員の特性」を少し知っておいてもらえるといかないと思います。教員は職員と比べた時に、相対的なものですが、職務を遂行する上での個人差がとても大きいです。職員よりも大きいと思います。なぜなら、標準化されて選抜されていないからです。それぞれの専門分野ごとの特性に応じて、標準化されたトレーニングをほとんど受けていないので、極

めて個人差が大きいです。しかし、面白いことに職務内容には共通性が起きています。ここが意外なのですが、授業、研究指導、研究、大学運営、学会活動、このような外部講演や原稿の執筆というのは、共通性はかなり高いのです。つまり、教員は極めて個人差の大きい人達が、比較的共通性の大きい業務をやっているのです。

職員は逆です。職員は、標準的なトレーニングは割合受けており、一括選抜されています。しかし、職員は職務内容には共通性は小さいです。例えば、皆さんの仕事と財務の仕事は全く違うと思います。施設の仕事も全く違うと思います。配属される部署によって、職務内容が全く違うと思います。

教員はどれほど分野が違っていても、結局、授業、研究指導、研究、大学運営を行っているのです。その点では共通しているのです。従って、教員を相手にする時に注意をすることは、教員は的外れな質問をする可能性があるということです。これを注意しておいてください。なぜならば、教員は事務組織の機能や職務文書のことを詳しく知らないからです。皆さんがどのようなメカニズムで動いているかということは、あまり教員はよく知りません。だから、とんちんかんなことを言うかもしれないのですが、それは「ああ、知らないんだな」と思って教えてあげてください。

## 9. 教員とのコミュニケーションのコツ

それから、多くの教員は、事務手続きをできるだけ簡便に済ませたいと思っています。実際、マネジメントが苦手な人が多いです。自分が教員だからよくわかります。こういう文書を時々もらいます。これは、名古屋大学の去年くらいに出た、夏期一斉休暇についての通知なのですが、少し読んでみてもらえますか？読めますか？これは、教員が怒る文書の典型です。これは何を言いたい文書なのか、一瞬わかりにくい文書です。夏期休暇について、何か添付ファイルがあるのですが、「その添付ファイルに実施内容が書いてあるから、ちゃんと見てね」と言っているのです。つまり、ここだけあればいいのです。こういう文書が日常的に送られてくる。教員は、目の前の実験をしなければならぬのに、入試の業務があるのに、とイライラするのです。だから、とんちんかんに怒ったりとか、職員の人に急に「なんだこれは！」と言ったりするのは、多分こういう背景

があると思います。例えばこのように言えばわかりやすいと思います。「今年度の夏期休暇について、次のように通知します。周知して下さい。こういう経緯がありますよ。以上。」

何を意味しているかというメタファなのですが、教員に情報を伝えるときは、出来るだけ短く、簡潔に伝えた方がいいです。「何をいつまでに、どうして欲しいのか。どこに、何を提出するのか。」

ここが肝心ですが、細かな状況説明や背景はあまりいりません。そればかりになってしまう可能性があります。それは後でいいです。まず、「何をどうして欲しいのか」をポンと伝えてもらった方がいいと思います。それでないと、なかなか話を聞いていてもつかめないことがあります。それから2点目ですが、根拠を示すといいです。主張の根拠です。「なぜそうするのか」というのは、「この規則で、こうなっているからです」とか「このような決定が役員会でありました」という根拠がやはり求められることがあって、大学教員は、ほぼ簡潔で根拠さえあれば何とか動きます。

## 10. これからの大学図書館

最後ですが、「これから、図書館がどういう方向に向かっていったらいいのか」ということについて、私見に過ぎないのですが、申し上げたいと思います。例えば、学生サークルとか、教員と図書館の職員とが協同して名著の読書会を開こうとか、大学生に見せたい世界の名画、イタリア映画の名作などの上映会や映画鑑賞会を図書館で開催したり、国立大学はコーヒー一杯出せませんが、少しコーヒーぐらいが飲めるような教職員の交流ラウンジを設けたらどうかと思うのです。その他、人事課などが実施している各種の教員研修や職員研修の「場所、空間」として図書館を活用するとか、どうかと思います。それから、国際的に見れば、図書館の職員が、例えばライブラリーサイエンスとかアカデミック・ライティングの授業を担当することは全く珍しくないと思います。従って皆さんは、15回通して行くかはともかくとして、何回かは学生を対象に授業をしてもらったらどうか、という時代が間近に来ると思います。

卒業生や保護者に対して何らかのサービスの展開をしていく、そういうことが色々考えられるのではないかと。となると、大学教員始め皆の「リトリート」としての機能になっていくのではないかと。つまり対

象者は学生だけではなくて、大きく広がっていくのではないかという風を感じています。

そのようなことで、私の話にさせていただきたいと思います。

---

(ちかだ まさひろ)